

追手門学院大学スポーツ研究センター

NO. **16**
2025.3

スポーツ研究センターニューズレター

「大阪・関西万博に想う」

追手門学院大学 スポーツ研究センター
センター長 辰 本 頼 弘



(本稿が発行されて、まもなくすると大阪・関西万博が開催されます。2025年4月13日(日)～10月13日(月)の184日間、大阪夢洲にて)

1970年に開催された大阪万博(EXPO'70)は、千里丘陵にて開催され「人類の進歩と調和」がテーマでした。子どもであった私はそんなテーマを知る由もなく、両親に連れられ会場に足を運ぶと世界各国の斬新なパビリオンが目飛び込み、また開催されていたイベントも大変興味深く今も心に刻まれています。私が万博会場を訪れたのは会期中数回だったと思います。いつ訪れてもワクワク感がいっぱい、パビリオン入場に長時間並んだ記憶があります。ただ、当時の目玉であったアメリカ館は常に長蛇の列。結局「月の石」は見れずじまいでした。

あれから55年。大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。現在目や耳に飛び込んでくる情報量は、当時と比べものにならないほど膨大となりました。この情報量が邪魔をしているのでしょうか、子どもの頃に感じたウキウキ感は今一つ起こりません。ただ、サブテーマでは「いのち」という言葉が取り上げられています。私が広義に解釈しているなかで、「健康」や「スポーツ」、「遊び」が学べる場でもあると思っています。さて、どのようなパビリオンが、どのようなイベントが中年期終盤となった私のころをくすぐってくれるのでしょうか。子どもの頃の楽しさは感じるのでしょうか。

ともあれ、会場に足を運ばないと体験が出来ませんので、これから足を運ぶスケジュールを立てることにします。

特別寄稿

茨木市×追手門学院大学×大塚製薬株式会社「朝食欠食改善プロジェクト」開始

追手門学院大学 地域スポーツ人材育成コンソーシアム 会員

大塚製薬株式会社 ニュートラシューティカルズ事業部 関西第一支店

近藤 航海・稲田 瑞希



【背景】

大阪府茨木市の朝食欠食数値（健康増進計画において次回2029年度に調査予定）を改善する目的で、追手門学院大学 社会学部の辰本ゼミの4年生2名（松下小雪さん、高橋謙人さん）と大塚製薬株式会社、茨木市が一緒になって、昨年7月から連携し活動しております。主に月に1回の面談を行い、取り組み内容の進捗確認やこれから取り組むべきことなどをディスカッションしております。

取組内容としては、3つの段階に分けて取組を進めており、現在は2段階目の取組を行っております。

【第一段階】

昨年3月に追手門学院大学の学生を対象に、朝食に関する調査を行ったところ、約30%の学生が朝食欠食者に該当していました。朝食を摂らない理由としては、「時間がないから」が1番多く、次いで「朝食を食べるより寝ていたいから」「面倒だから」という理由が続きました。また、朝食欠食者の約3人に1人は、小中学生の頃から摂取していないことが分かりました。



【第二段階】

第一段階の結果を踏まえ、学内での朝食摂取啓発活動に取り組み始めています。学生2名とともに、「学生目線でのような施策があれば朝食を食べるか」についての協議を行い、実際に学生の意見を取り入れ、啓発動画の作成、フード自動販売機の設置が決定。啓発動画については学生自身に作成いただき、自動販売機についても、学生10名との試食会を経て、投入品目を決定しました。また、この取組を学内に周知するため、学生に告知ポスターも作成いただき、学生主体で様々な取組を実施中です。大塚製薬側でも学生のサポートだけでなく、茨木市との連携ポスターの作成や、そのポスターを用いた自動販売機のラッピングデザインの作成等、新年度の一斉開始に向け、学生・大塚製薬の両社で動きを進めております。



※学生作成動画抜粋

【第三段階】

今後は、学内だけでなく学外への発信も考えており、イオンモール茨木や茨木市関連企業とともに取組を進めていく予定です。学内アンケートにおいて、小中学生からの朝食欠食問題が明らかとなったため、茨木市とも連動しながら市内小中学生への啓発に注力できればと考えております。既に市内小学校34校・中学校14校の計48校には大塚製薬作成の朝食啓発ポスターを配布・掲示済ですが、学生さんから小中学生へ直接啓発していただくことで、より身近で伝わりやすい啓発に繋がるのではないかと考えます。新たな学生の参加も募りながら、追手門学院大学・茨木市・大塚製薬で継続した取組を行い、最終的には「追手門学院大学モデル」を茨木市内他大学に広めていきたいと考えております。



国際学会報告

追手門学院大学 スポーツ研究センター 所員
社会学部 教授 馬込 卓弥

2024年11月21日から22日にポルトガル・ポルトで開催された [The 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support] に参加し、研究成果を口頭にて発表しました (Fig1)。

近年、アスリートのトレーニングにおいて、パフォーマンス向上のためにIT技術の導入が進捗しており、国内外を問わず、種々のスポーツ現場において実装されています。

私たちの研究チームでもデバイスを用いた研究を行っており、発表内容は、「The development of automatic training analysis using 3D accelerometer in male young elite soccer team」というタイトルで、エリートユース男子サッカーチームにおける3次元加速度計を用いたトレーニング解析の開発に焦点を当てた成果について報告しました。

本研究では、3次元加速度計を用いて選手の動きを詳細に記録し、そのデータを自動的に解析するシステムの構築を目指しました。これにより、トレーニング中の運動強度やパフォーマンスをリアルタイムで把握し、効率的なトレーニング計画の策定や怪我の予防に役立てることが期待されます。学会参加者からは、データの精度やシステムの実用性、



Fig2 ポルト市街地



Fig1 発表の様子

他のスポーツへの応用可能性など、多くの質問や意見が寄せられ、活発な議論を行い研鑽が積めました。本学会への参加を通じて、最新の研究動向や技術革新にも触れることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

また、ポルトの美しい街並み (Fig2) や豊かな風土にも触れ、学術的な刺激だけでなく、文化的な経験も得ることができました。今後も、本研究所をさらに充実させ、スポーツ医学の発展に寄与していきたいと考えています。

【付記】本研究はJSPS科研費JP21K09277の助成を受けたものです。

パリオリンピックにおける分析スタッフとしての帯同記

追手門学院大学 スポーツ研究センター 所員
社会学部 講師 林 勇樹

はじめに

2024年6月15日から8月6日まで、およそ2か月間フランス・パリで行われた「第33回オリンピック競技大会」競泳競技の日本代表チームに、分析スタッフとして帯同いたしました。ここでは、遠征において私が担当した業務の概要や、現地での活動の様子などを簡単にご報告します。なお、本記事はあくまで分析担当の立場から見た活動記録であり、チームや選手の結果・状況については差し控えることをご了承ください。



イタリア・ローマでの大会参加

最初の滞在地となったのはイタリア・ローマです。歴史ある「セッテコリ競技大会」への参加から遠征が始まりました。セッテコリのプールは、かつてローマオリンピックが行われた施設に隣接する屋外プールで、日差しや雨を遮るものがない開放的な環境です（図1）。到着後は、選手の動きを正確に分析するためにプールの15メートル地点を蛍光テープでマーキングするなど、撮影・分析に適した環境を整えました（図2）。

大会中は天気が崩れて急に雨が降ったり、日差しが強く猛暑になったりすることもありましたが、同様に分析スタッフを帯同していたブラジルやイギリス、香港などのスタッフと協力し合い、対策を講じながら乗り切りました（図3）。イタリアでの競技会を終えると、次の拠点となるフランス・ナンテルへと移動します。



図1 セッテコリ大会の会場プール



図2 プールへのマーキング



図3 猛暑と豪雨が互い違いにくる中での作業

パリ・ナンテル大学での事前合宿

7月12日には、パリ郊外にあるパリナンテル大学（Université Paris Nanterre）に到着し、事前合宿を開始しました。ナンテル大学はパリオリンピック開催に向けてスポーツ関連施設を大規模に改修しており、大学のプールやトレーニングジムなどを各国代表の事前合宿地として提供していました。大学の先生方からも多大なサポートをいただき、快適な合宿環境が整えられていました（図4）。

フランス・アミアンでの最終合宿

ナンテル大学での合宿を終えた後は、フランス・アミアン市へ移動し、最後の調整を行いました。アミアン市では卓球・競泳の日本代表が事前合宿を行っており、市民プールなどの公共施設を一時的に貸し切っていただくなど、現地の方々の協力で素



図4 ナンテル大学の競泳・ダイビング研修用プール

晴らしい環境を整えていただきました（図5）。プール内には競技記録測定システムも導入されており、日々の練習映像の撮影や、水中撮影など、多角的な分析を行うことが可能でした。選手やコーチとコミュニケーションを重ねながら、改善ポイントやアプローチ方法を検討する日々が続きました（図6）。



図5 施設入口に掲げられた応援旗



図6 現地サポートの様子

オリンピック本番会場での活動

いよいよ本番会場に入ると、会場はとても大きく観客席も多く、撮影スタッフが活動を許されたフロアは地上階から数えて7階ほどの高さに相当する最上段の場所でした（図7）。高さは想定内ではあったものの、プール中央にまっすぐカメラを向けられない端寄りの位置だったため、通常とは異なるアングルでの撮影となりました（図8）。



図7 観客席最上段から見た競技会場



図8 作業場所（各国1箇所割当）

各国の撮影スペースは大会実行委員会によって事前に割り当てられており、今大会では左右をアメリカとイギリスに囲まれた配置になりました。試合が始まると、狭い通路は各国の三脚や機材で埋め尽くされ、お互いに譲り合いながらサポートを行う状態でした（図9）。

オリンピックは各国分析スタッフにとっても集大成の場であり、様々な新しい分析手法や機材を試そうとしている様子が見え、分析スタッフの立場からは大変興味深いものがありました。

おわりに

以上が、私が日本代表チームの分析スタッフとして帯同した際の主な活動内容です。あらためて現地の皆様や大学関係者、他国分析スタッフの方々にも感謝を申し上げたいと思います。今後も、分析スタッフとしての経験を活かし、より良いサポート体制の構築やスポーツ研究の発展に貢献していければと考えます。

（文責 林 勇樹）



図9 各国分析スタッフの作業エリアの混雑具合



飛び出せ世界へ！

がんばる追大アスリート
第12回

追手門学院大学チアリーダー部

岩崎 花音さん（社会学部2回生）

真銅学長と岩崎さん

1. チアリーディングを始めたきっかけは何ですか？

小学一年生の時にバスケットボールのイベントでチアリーダーを初めて見たとき、人の上に乗っているのに笑顔で演技しているところを見て、私もやりたいと思ったのがきっかけです。

2. チアリーダーの魅力や好きなところは何ですか？

チアリーダーの魅力は、見てくださる方に元気・勇気・笑顔届けられることです。その中でもチアリーディングの最大の魅力はスタントです。チームメイトとの絶対的な信頼が必要なので、一人では決してできません。チームメイトと練習を重ね、演技をやり切ったときは本当に最高で好きな瞬間です。

また、アメフトや野球の応援でフィールドに立って近くで応援できるのがチアリーダーの特権だと思っています。

3. 今まで（高校・大学）のチアリーダーの戦歴を教えてください

- ・2020年 第29回関西チアリーディング選手権大会 cheerleading spirit部門Div.1 優勝
- ・2020年 JAPAN CUP2020チアリーディング日本選手権大会Div.1 優勝
- ・2021年 第26回西日本チアリーディング選手権大会 高等学校部門Div.1 優勝
- ・2022年 第31回関西チアリーディング選手権大会 Div.2 準優勝
- ・2022年 JAPAN CUP2022チアリーディング日本選手権大会Div.1 優勝
- ・2023年 第33回全日本高等学校チアリーディング選手権大会Div.1 優勝
- ・2023年 CDE Cheerleading Championship 2023 Cheer大学部門 優勝
- ・2023年 USA Regionals2023甲信越大会Show Cheerleading部門 優勝

- ・2024年 University World Cup Cheerleading Championships 2024 spirit Program Game Day 第2位
- ・2024年 2024 ICU WORLD CHEERLEADING CHAMPIONSHIPS COED PREMIER 準決勝5位、決勝7位
- ・2024年 USA School & College Nationals 2024大学編成Show Cheerleading部門 優勝
- ・2024年 USA チアリーディング&ダンス学生選手権大会2024 Cheerleading部門 優勝
- ・2025年 USA Regionals 2025 Show Cheer部門 優勝



4. 2024年に日本代表としてアメリカ大会に出場されましたが、感じたことや学びなどありましたか？

チアリーディングの本場であるアメリカで日本代表として出場し、世界にはたくさんの上手な選手がいることを感じました。世界チャンピオンであるアメリカは、やはりオーラや体作りから違うので、技術を上げるとともに体作りを頑張りたいと思いました。

日本代表チームは、個人選抜を経て、ひとつのチームが構成されます。

いつも違うチームで活動している中で、日本代表とし

て一つのチームを作ることは決して簡単ではありませんが、一人一人がチームの事を考えてチームのために自分は何ができるのかを考える事が大切だと改めて思いました。

私は、関西から一人で通っていたのですが、環境のせいにして諦めずに東京に通い続けて良かったなと思っています。関東住の友達もでき、社会人でも日本代表として頑張っているチームメイトを見て、凄く価値観が変わりました。いつも支えてくれる家族にとっても感謝しています。

5. 本学のチアリーダー部に所属していますが、自分の立ち位置や、今後目指すべきことはありますか？

日本代表として、世界大会に出たことやそれまでの過程での練習、全てが私の学びであると思います。今は、専属のコーチがいないため、自分達で構成や曲作りをしています。海外のチアリーディングの雰囲気を日本のチアリーディングにも広めたいです。その為に、動画研究を誰よりもしている自信があります。私たちの代で世界大会に出場することを目標としているので、その為の準備を今から行っていききたいと思います。

6. 2025年も日本代表としてアメリカ大会に出場されますが、2回目の選出ということで意気込みなどありますか？

昨年度は、惜しくもメダルを獲得することが出来ませんでした。今年は、絶対メダルを獲ってきます。また、

大切な役割を任せてもらっているので、日本代表としてふさわしい演技をしてきます。

7. 将来の目標は何ですか？

選手を引退したら、指導者として今まで学んできたことをこれからの選手に全て伝えていきたいです。

選手の間、チアリーディングがオリンピック競技になったら、挑戦したいと思っています。

8. 追手門学院大学でも岩崎さんの今後の活躍を応援しています。応援してくれる方に一言お願いします。

いつも支えて下さり、応援してくださる皆さま、本当にありがとうございます。

チアリーディングを全力で楽しむことができるのも沢山の支えがあるおかげです。

感謝の気持ちを忘れず自分らしく、笑顔で頑張ります。絶対メダル獲得してきます。

応援よろしくお願いします。

(2025年1月に実施)

聞き手：スポーツ研究センター 巽 樹理)



【地域連携事業】2024年度 高齢者の運動実践支援に関する報告

<はつらつ運動サークル>

昨年度に引き続き、2024年度も当スポーツ研究センターと茨木市福祉部地域福祉課、茨木市老人クラブ連合会、シンコースポーツ㈱などの団体が連携し、サークル運営を行った。水中運動のサークルは、西河原市民プールならびに五十鈴市民プールにおいてトレーニングを実施した。陸上運動のサークルは、本学安威キャンパスの体育館でトレーニングを行った。また、トレーニングを実施しないコントロールグループも編成した。トレーニング日程は、表1の通りであり、春学期13回、秋学期13回、計26回とした。春期の終わりと秋期の終わりににおいて測定会を開催した。

表1 2024年度のはつらつ運動サークル日程

★春日程																		
グループ	曜日・時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	測定会			
西河原市民プール	金 12:15-13:00	3/29	4/5	4/12	4/19	4/26	5/3	5/10	5/17	5/24	5/31	6/7	6/14	6/21		継続者	新入会者	
五十鈴市民プール	水 13:15-14:00	4/3	4/10	4/17	4/24	5/1	5/8	5/15	5/22	5/29	6/5	6/12	6/19	6/26	事前	1/13, 20, 21 (土,土,日)	3/26 (火)	
追大体育館	月 8:15-9:00	4/8	4/15	4/22	4/30 (火)	5/6	5/13	5/20	5/27	6/3	6/10	6/17	6/24	7/1	事後	6/29, 7/6, 7 (土,土,日) ※6/29は、追大グループを除く		
★秋日程															※継続者は、春の事前を、前年の事後測定とする			
グループ	曜日・時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	測定会			
西河原市民プール	金 12:15-13:00	10/11	10/18	10/25	11/1	11/8	11/15	11/22	11/29	12/6	12/13	12/20	12/27	1/10		継続者	新入会者	
五十鈴市民プール	水 13:15-14:00	10/9	10/16	10/23	10/30	11/6	11/13	11/20	11/27	12/4	12/11	12/18	12/25	1/8	事前	9/21, 28 (土,土)		
追大体育館	月 8:15-9:00	10/7	10/14	10/21	10/28	11/4	11/11	11/18	11/25	12/2	12/9	12/16	12/23	1/6	事後	1/11, 12, 18 (土,土,日)		

各グループの構成ならびに平均年齢は、表2に示す通りであり、特に体育館でのトレーニング参加者の高齢化が進んでいることが判る。

表2 2024年度秋学期時点での参加者数

▼トレーニンググループ：48名・76.1±5.3歳（平均±標準偏差）・男性6名、女性42名

- ①追手門学院大学体育館 24名（1名中断）・77.8±5.4歳 ・男性2名、女性22名
- ②西河原市民プール 19名（1名中断）・74.9±4.4歳 ・男性4名、女性15名
- ③五十鈴市民プール 5名 ・72.4±5.7歳 ・男性0名、女性5名

▽コントロールグループ：11名・76.2±5.0歳・男性2名、女性9名

今回の報告では、高齢期の体力で重視されている、脚の体力指標に焦点を当てて2024年1月と2025年1月の2時点の比較を行った結果を図に示した。2時点の測定を完遂したトレーニンググループ41名のデータ（プールと体育館、両グループ）を用いて集計を行った。図の上段、開眼片足立ちの縦棒は、2024.1時点のデータ（測定上限値に対する%）を値の大きさに並べ替え（左側）、同様な順番で2025.1のデータを並べて示した（右側）。概ね、16名中10名は100%を維持し、新たに100%（120秒）に到達した者も4名いた。全体の平均値には、有意な差が見られなく、総体的には、片足立ちの能力（静的バランス能力）を維持していたと考えられる。

6分間歩行においては、多くの者が体力レベルを維持していた（2時点の有意差なし）。プラス・マイナス50m、10～20%の変化がみられたものの、トレーニンググループにおいて、持久力が維持されていたと考えられる。

高齢者の能力の指標であるTimed Up and Goの指標においては有意な差が見られ、5.69±0.9が5.52±0.8秒に改善した（t検定, $p<0.05$ ）。素早く、バランスよく移動できる能力を維持することは、転倒予防の観点から重要であり、本学のはつらつ運動サークルの取り組みが、参加高齢者のバランス能力を高めている可能性が示唆された。（報告：松井 健）

脚に関する体力指標の変化

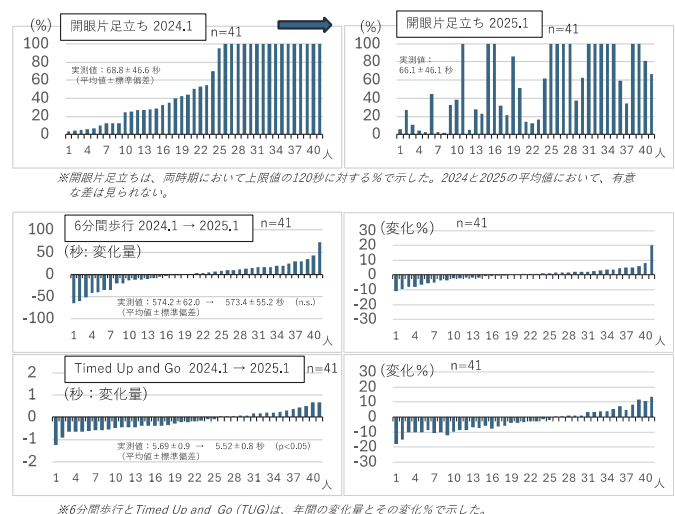


図 トレーニンググループにおける開眼片足立ち、6分間歩行、Timed Up and Go (TUG) 1年間の変化

第14回追手門学院大学杯観戦記



茨木市スポーツ少年団 野球部会 Aブロック長 清田 盛雄

スポーツ少年団に所属する全15団の中から所属する各ブロックのリーグ戦を勝ち抜き選出された計8チームが追手門学院大学のグラウンドに集い、ブロック選抜の頂点を目指し、冬の厳しい寒さを吹き飛ばすほどの熱闘を繰り広げました。開会式・2日目は好天に恵まれ、3日目は朝の時点では小雨が降っており時間の延期等の心配も出ましたが、試合開始前には雨もやみ、予定通りに全試合を終えることができました。

どの試合もさすがに各ブロックを勝ち上がったチーム同士での試合であり、白熱した好ゲームで一挙手一投足いずれも緊張感のある攻防でした。新チームであった春先には、まだまだこれからと思うプレイが多く見られましたが、卒団までのラストスパートに入った今大会では一回りも二回りも大きくなった体とともに、随所に力強さと野球脳の成長を感じさせるプレイを見ることができました。また、グラウンド内を駆け回る選手、ベンチ、応援席が一体となって、たった一つの白球を追いつけ盛り上がる姿に、見ている我々も感化され手に汗を握りながら真剣に見入ってしまいました。

決勝戦では今大会好調な中池ファイターズと試合巧者の中条ウイングスで行われましたが、自力に勝つ中条ウイングスが偶数イニングすべてで2点以上挙げて完勝し前年に続き2年連続での優勝を飾りました。三位決定戦では茨木プレジャーズが特設フェンス越えのホームランなどで効果的に得点を挙げて安威インディアンズを下し、今大会から新設された第三位盾を手に入れました。

追手門学院大学グラウンドで行われる年一回の大会は我々運営側にとっても特別なもので、今年もこのグラウンドで年内の大会を締めくくることとなりました。

最後に、大会開催にあたり、多大なご尽力とご協力をいただいた関係者のみなさまに感謝申し上げます。ありがとうございました。



追手門学院大学 スポーツ研究センターニューズレター No.16

■ 編集・発行 2025年3月31日

■ 編集代表者 辰本 頼弘

■ 発行所 追手門学院大学 スポーツ研究センター

〒567-8620 大阪府茨木市太田東芝町1番1号

TEL/072(665)9217 (研究所・センター窓口)

E-mail sports@otemon.ac.jp

<https://www.otemon.ac.jp/research/labo/csr.html>